

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

英国の三浦環：
電子新聞アーカイヴを用いた1914~1915年の受容調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早坂, 牧子, Hayasaka, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1319

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英国の三浦環 —電子新聞アーカイヴを用いた1914～1915年の受容調査

早坂牧子

1. はじめに

日本におけるオペラの創成期を支えたソプラノ歌手、三浦環（1884-1946）が海外デビューを果たしたのは、1914年10月24日、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで開催された英赤十字社主催の慈善演奏会であった。この演奏会が評判を呼び、翌年にはロンドン・オペラ・ハウスでのプッチーニ《蝶々夫人》公演でタイトル・ロールを歌うこととなる。日本人が演じた「本物の蝶々さん」は大変なセンセーションを引き起こし、以降出演した演奏会の評が海外にも及んで、米国でのオペラデビューの道が開かれる。1914～1915年にかけての英国での音楽活動は、続く20年に渡る三浦の国際的な歌手活動において、また邦人による蝶々夫人の演奏史においても、重要な契機であった。

近年、米国のオペラ受容におけるオリエンタリズムやジェンダーの影響について考察した論考で三浦への言及が増えている一方で¹、英国での三浦の動向はあまり学問的な関心を持たれてこなかった感がある²。三浦による「日本人の蝶々さん」が広く認知され、オペラ歌手として活躍の幅を広げるのはやはり1915年以降の米国時代であるから、英国よりも米国での活動が重要視されるのは当然と言えるかもしれない。しかし、三浦の英国滞在には、単に彼女が海外デビューを果たしたという以上の意味は見いだせないのだろうか。20世紀初期、国際的なキャリアを志向したソプラノ歌手という文脈において、三浦の英国滞在はどのように位置づけることができるのか。「評判を呼んだ」と言われる三浦の歌唱は、では実際どのようなもので、具体的にどのような評価がなされたのだろうか。

こうした問いを検討する際、手助けのひとつとなるのが、昨今著しい進歩を遂げている電子新聞アーカイヴの利用である。10年前であれば、英国の様々な地域で発行された古い新聞記事

-
- 1 こうした先行研究の例として、Mari Yoshihara, *Musicians from a Different Shore—Asians and Asian Americans in Classical Music* (Temple University, 2007) (本書を日本の一般読者向けに改訂した書籍に『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか？人種・ジェンダー・文化資本』アルテスパブリッシング、2013年)がある)、Kunio Hara, *Staging Nostalgia in Puccini's Operas* (Ph.D. diss, Indiana University, 2012)、Robert Charles Lancefield, *Hearing Orientality in (White) America, 1900-1930* (Ph.D. diss, Wesleyan University, 2004) が挙げられる。
 - 2 例えば、三浦の生涯と音楽活動を詳細にまとめた研究資料である田辺久之、『考証三浦環』(近代文藝社、1995年)においても、海外における演奏批評の取り扱いは限定的である。多くの文献において、三浦の英国での動向は、吉本明光編、『お蝶夫人 三浦環自伝』(右文社、1947年；復刻版として『三浦環—お蝶夫人』、「人間の記録」第27巻、日本図書センター、1995年)における三浦自身の証言以上の内容は見られない。

を読むためには、各自治体の図書館か、ロンドン郊外のコリンデールにあった大英図書館の新聞閲覧室に出向く必要があったが、The British Newspaper Archive (BNA)、Gale Primary Sources (GPS) といった電子アーカイブの登場によって、1700年代以降の多くの新聞記事をインターネット上で閲覧でき、単語検索機能を使えば大量の関連記事を即座に集めることも可能となった³。こうしたオンライン・アーカイブを用いた調査には、実物の新聞をめくって得られる関連情報や気づきを見落としをしまったり、検索システム自体の不具合や資料の未電子化のため重要な記事に行き着かなかつたりする危険性や、画像の解像度がやや低いという短所もあるが、日本にいながら英国の新聞資料を大量に調査することができる利便性は言うまでもない。また、三浦研究に関していえば、そもそも日本語で書かれた文献の中に海外の資料を検討したものは少なく、多くが三浦の口述と国内資料を専らの拠り所としていることを考えると、日本内外の資料を双方向的に検証することで、より正確な事実関係が明らかとなることもあるだろう⁴。

そこで本稿では、BNA 及び GPS 収録の英国紙に記載された三浦に関する情報を収集し、事実関係の再検討を試みる。音楽雑誌等を網羅する他のデータベースは用いず、あえて調査の手段を BNA・GPS に絞ることで、これらのアーカイブの利用が今回の調査にどの程度有用であったかを示したい。このように収集した情報をもとに、三浦の歌唱が英国でどのように披露され、いかに受容されたか、また後年の欧米での活動と比して、英国における三浦の初期の歌手活動をどう評価できるか、現在までに判明している情報と比較しつつ、考察する。

2. 英国における三浦環の演奏活動

BNA 掲載の新聞記事を検討する前に、これまで判明している三浦の渡英の背景と英国での活動について、伝記資料の情報をもとに整理しておきたい。

2-1 渡欧、ロンドン入り (1914年5月22日～8月16日)

東京音楽学校在学中から数々の演奏会に出演し、東京音楽学校助教授、帝国劇場の音楽教師を歴任するなど、それまで既に音楽家として評価を得ていた三浦であるが、離婚と再婚をめぐるスキャンダルに加え、音楽の本場ヨーロッパで学びたいという気持ちの高まりもあって、1914 (大正 3) 年 5 月 22 日、夫である三浦政太郎の留学に伴いベルリン入りを果たす。往年の

3 The British Newspaper Archive は、出版・制作会社 DC Thompson の子会社である Findmypast Newspaper Archive Limited と大英図書館の提携によるオンライン・アーカイブ・サービス。2018年8月31日現在、電子化対象タイトルは964、総ページ数は2750万枚を超え、特に19世紀以降の新聞記事は収録数が充実している。今後10年をかけ、大英図書館所蔵の新聞記事から4000万ページの電子化を目指すという。Gale Primary Sources は、ランゲージラーニング社 Gale の電子コレクションを統合したプラットフォーム。19th Century British Library Newspapers, The Illustrated London News, The Times Digital Archive, The Sunday Times Digital Archive を横断検索できる。

4 三浦の口述記をまとめた吉本明光は、三浦の口述内容は記憶違いや不正確な情報を含んでいる可能性があり、「いずれ正確な資料によって訂正したい」と述べている。吉本編、『お蝶夫人』、247頁。

名ソプラノと謳われたリリー・レーマン Lilli Lehmann (1848-1929) に教を請おうと、ヴァカンスからの帰りを待つが、その間に第一次大戦が勃発し日独関係が悪化したため、8月16日にロンドンへ渡っている。戦時下で銀行から一度に300円以上引き出すことができず、満足な生活費も確保できないまま、殆ど着の身着のままの渡英であった⁵。日本大使館の指示で、ハムステッド地区の下宿に落ち着いた⁶。

2-2 ヘンリー・ウッドのオーディション (1914年9月)

三浦は誰に歌を教わろうかと考えた末、「プロムナード・コンサート」で知られる指揮者ヘンリー・ウッド Sir Henry J. Wood (1869-1944) に手紙を出す⁷。二度出しても返信がなかったため、紹介状もなしに見ず知らずの日本人には会わないのだろうと考えて、自分は日本の声楽家で、コノート公アーサーの来日時には御前演奏を行った、一度歌を聴いてほしい、と詳しい経歴を添えて書き送ったところ、無事オーディションの約束を取り付ける。クイーンズ・ホールで行われたウッドのオーディションで、三浦は当時最も自信があったというヴェルディ《リゴレット》からジルダのアリア「慕わしき御名」‘Caro nome che il mio cor’ を歌っている。自身のリリコの声質が活かされ、声楽家としての技術を十分に示せるレパートリーをと考えてのことだろう。国際的に活躍する日本人オペラ歌手の先達が殆どいない中であって⁸、ウッドのオーディションは三浦個人のみならず日本における西洋音楽の程度を試される機会でもあり、三浦は「文化の面では何一つとして一等国の資格を持っていなかった日本の面目のためにも、このテストにはどうしても及第しなければ」と思い必死に歌ったという⁹。残念ながら三浦は「慕わしき御名」の録音は残していないが、アジリタの技術が問われるこのアリアを彼女がどのように歌ったか、興味をひくところだ。ウッドは三浦の演奏に満足したようで、当時オペラ界のスターであったメルバ Nellie Melba (1861-1931) やカルヴェ Emma Calvé (1858-1942) にも並ぶ素質と技術を持っていると述べ、自分が教える必要はないので自らのオリジナリティを探究するように、と激励したという¹⁰。このオーディションには後の英国首相の母、ランドルフ・チャーチル夫人 Jeanette, Lady Randolph Churchill (1854-1921) が同席しており、彼女の計らいにより、翌月のロイヤル・アルバート・ホールでの演奏会に三浦が出演することが決まる。それも、19世紀最大のソプラノ歌手と言われたアデリーナ・パッティ Adelina Patti

5 田辺、『考証三浦環』、132-134頁。三浦自身も「私はその時分ドイツから第一次世界大戦のはじまった當時で逃げていつたレフュジー（避難民）でございましたので着の身着のまゝで」と述べている。三浦環、『わが芸術の道』（世界創造社、1942年）、8頁。

6 この下宿の主人はスコットランド人のパートン夫人なる人物で、彼女との交流については、三浦のオーディションに際して流行歌 ‘Give Me Your Kiss’ を歌うよう勧めた、三浦の名が知られるようになるとトラファルガー広場に集まる人々の前で「これがマダム・ミウラだ」と自慢した、等、数々のエピソードが三浦の自伝で語られている。吉本編、『お蝶夫人』、15-40頁参照。

7 三浦がウッドに手紙を出したのは、当時日本大使館の二等書記官を務めた山崎馨一（1882-1945）の助言によるという。田辺、『考証三浦環』、135頁。

8 三浦に先駆けて海外の楽壇で活躍した歌手に、1911年メトロポリタン歌劇場でスズキを歌った高折寿美子（1886-1961）がいる。

9 田辺、前掲書、19頁。

10 前掲書、19頁。

(1843-1919) との共演であった。

2-3 ロンドンデビュー (1914年10月24日)

かくして1914年10月24日、ロイヤル・アルバート・ホールでの「愛国大演奏会」‘A Great Patriotic Concert’で三浦はロンドンデビューを果たす¹¹。6人の独唱者、300人のオーケストラとブラスバンド、1000人の合唱隊を正面に、約1万人の観客が馬蹄形のホールを埋めた、大規模な演奏会であった¹²。ジョージ5世と王妃メアリー・オブ・テックを筆頭に、王室関係者、政府高官、各国の大使が列席する上、演奏活動から引退していた老齢のパッティが久々に登場するとあって、演奏会のチケットは前日までに全て売り切れ、会場はさながら「ロンドン空前のお祭り騒ぎ」¹³であったという。以下に示すプログラムには、戦時下の恤兵演奏会らしく、士気を高揚させる軍歌や愛国をうたう曲が並ぶ¹⁴。

(Part 1)

National Anthem

Overture ‘Britannia’ (Mackenzie-Rogan)	The Brigade of Guards
‘Drake’s Drum,’ ‘Devon, O Devon’ (Stanford)	Mr. Plunket Greene
‘It Comes from the Misty Ages’ (Elgar)	The Royal Choral Society
‘Land of Hope and Glory’ (Elgar)	Miss Phyllis Lett
‘Fall In’ (Frederic Cowen)	Mr. Charles Mott
‘Voi Che Sapete’ (Mozart)	Mme. Adelina Patti
Encore – ‘Home, Sweet Home’ (Bishop)	Mme. Adelina Patti

(Part 2)

‘Sakura (Cherry Blossom)’	Mme. Tamaki Miura
‘Hotaru (Glow Worm)’	Mme. Tamaki Miura
‘Caro Nome’ (Verdi)	Mme. Tamaki Miura
‘Call to Arms’	Mr. George Parker, the Royal Choral Society
‘There’s a Land’	Miss Carrie Tubb
‘It’s a Long Way to Tipperary’ (Judge)	

11 ロイヤル・アルバート・ホールの公式ホームページに、この演奏会についてアーキビストが紹介した記事がある。三浦の名が印字されたポスター画像も掲載されている。Suzanne Keyte, “A Great Patriotic Concert to Help the War Effort-24 October 1914,” <https://www.royalalberthall.com/about-the-hall/news/2014/october/a-great-patriotic-concert-to-help-the-war-effort-24-october-1914/>, accessed 8 September, 2018.

12 演奏者の人数は三浦の証言に基づく数字。田辺の『考証三浦環』では合唱隊740人となっている。観客の動員数については資料によって人数がまちまちで、三浦は2万3000人と言っているが、新聞には「8000人」あるいは「1万人以上」という記述も見られる。アルバート・ホール創建当時の収容人数は約8000人であるから、多く見積もっても1万人前後ではなかったか。

13 吉本編、『お蝶夫人』、27頁。

14 以下の資料を参照した：‘King and Queen Attend a Patriotic Concert,’ *The Scotsman* (26 October, 1914), p. 4；‘King and Queen at Patriotic Concert,’ *Leicester Daily Post* (26 October, 1914), p. 2；吉本編、『お蝶夫人』、33-35頁。

Russian, Belgian, Japanese, and French National Anthems

‘Rule Britannia’

‘God Save the King’

1部の終わりにパッティ、2部のはじめに三浦という構成は、19世紀末の余韻の漂う音楽界から、東洋出身の音楽家も活躍する新時代への移り変わりを象徴するかのようでもある。事実、三浦が海外デビューを果たしたこの演奏会がパッティの生涯最後の舞台となった。観客は「恋とはどんなものかしら」‘Voi che sapete’を歌いきったかつての大プリマ・ドンナに惜しみない賞賛を送り、鳴り止まない拍手に応じて、当初は予定されていなかったアンコールが演奏された。曲目は、オペラ引退後のパッティが演奏会の最後にしばしば歌った「埴生の宿」‘Home Sweet Home’であった¹⁵。

休憩を挟み、日本髪に着物の出で立ちで登場した三浦を、満員の観客が拍手で迎える。ここで三浦は、日本の歌をというチャーチル夫人の求めに応じて「さくらさくら」と「蛍」を歌い、ヴェルディの「慕わしき御名」も披露している¹⁶。日本の歌2曲の伴奏は、三浦が持参したピアノ譜をウッドがオーケストレーションしたものであった。三浦の回想によれば、何十台ものハーブとフルートが主の編曲になっており、ハーブがまるで琴のようで、忘れ難い素晴らしい伴奏であったという¹⁷。ハーブを何十台も、というのは物理的にも経費の点からも無理があるので恐らく誇張であろうが、英国の音楽祭や慈善演奏会では19世紀後半からオーケストラが400人を超えることも珍しくなかったから、正確な数字はともかく演奏者は膨大であったことは間違いない。同じアルバート・ホールで三浦が出演する2年前に開催された、タイタニック号専属音楽家の遺族のための慈善演奏会の写真が残されているが、この時のオーケストラは472名で、ハーブは指揮台両脇に6台が配されているのが確認できる¹⁸。

三浦が歌い終わるとアンコールの拍手が沸き起こり、幾度も舞台へ呼び戻された後楽屋へ戻ると、パッティが三浦を抱擁し「大変立派な歌を聴かせて下さって有り難う」と言ってキスをしてくれたというエピソードを、三浦は後年繰り返し語っている。大歌手であることを感じさ

15 少年時代からレコードでパッティの歌唱に親しんだという徳川頼貞は、この演奏会での老齢のパッティの歌唱はもはや全く魅力を失い、賞賛は彼女の歌というより歌手としての最後の舞台に向けて送られたものに聞こえたこと記している（『蒼庭樂話』、57頁）。三浦はというと、‘Home Sweet Home’を歌うパッティの声は暖かく愛情に満ち、「これが本当の『スイート・ホーム』の美しさだ。私は死に物狂いの勉強をしても、一生かかってもこのアドリナ・パティの芸術の境地には到達出来そうもない、とすっかり敬服いたしました」と述べている（吉本編、『お蝶夫人』、30頁）。

16 この演奏会の主役は何といっても特別出演のパッティであり、ヴェルディのオペラを得意としたパッティへの配慮から、チャーチル夫人は三浦に対してあくまで日本の歌のみを歌うよう要求した。最終的には三浦が押し切る形で「慕わしき御名」を歌うことを了承してもらったというエピソードが自伝で語られている。前掲書、24-26頁。

17 前掲書、28-29頁。この編曲譜が残されていないか、現在調査中である。

18 John Williams, ‘Take a Look: Titanic Band Memorial Concert Photograph Now on Display to the Public!’ <<https://www.royalalberthall.com/about-the-hall/news/2017/august/take-a-look-titanic-band-memorial-concert-photograph-now-on-display-to-the-public/>>, accessed 8 September, 2018.

せないパッティの謙虚な人柄と若々しさは、彼女の円熟した舞台表現とともに強く三浦の印象に残り、生涯の手下となった。ロンドンへ渡って二ヶ月余り、英国の重鎮ウッドに認められ、アルバート・ホールでの演奏会を果たし、世界的名歌手パッティに間近で接した経験は、三浦の演奏家としての自信を高め、優れた音楽家としてあるべき姿を考える契機となったのである。

2.4 デビュー以降の演奏会と出演料（1914年11月30日～1915年3月2日）

アルバート・ホールでの演奏会出演は大変な評判を呼び、以降三浦は英国内でいくつかの演奏会に出演している。1914年11月30日、アルバート・ホールで開催された「スコットランド大音楽祭」を観覧した穂積重遠の印象をまとめてみよう¹⁹。この演奏会はその名通りスコットランド民謡やバグパイプの演奏を聴かせる大衆演奏会だったが、三浦が真打ちの呼び物とみえ、着物姿の三浦の大笑が看板に出ており、客席に着いた大勢がプログラムの三浦の項をあけて噂している。スコットランド兵のパイパーズが会場をぐるりと巡って開演を告げると、300～400人の合唱隊によって連合国の国歌が歌われ²⁰、数人の独唱、合唱、スコッツ・ガードによる演奏が終わると、いよいよ三浦が登場する。黒地に白菊の着物、白襟、金欄の丸帯、二百三高地に金の簪、靴をはき、手袋をした手に女扇という出で立ちの三浦は、人形のように小さくかわいらしく見えたが、態度は堂々としたもので、「隠せず壇上に進み、満場をズッと見渡し、一寸しなを作つてにこやかに一禮するところ、小さなからだで数千の聴衆を一呑にした」という²¹。演奏会の1部では「さくらさくら」、「アヴェ・マリア」を歌い、2部でスコットランドの流行歌「エディンバラから1マイル」‘Within a Mile o’ Edinboro Toon’をスコットランド訛りで歌った²²、聴衆の中にはスコットランド人も多かっただろう、大変な盛り上がりで、歌い終わっても拍手喝采がやまず次の歌手が出てきたため渋々静まる調子で、他の出演者たちが気の毒なほど霞んでしまったという²³。また、日本で三浦の歌唱に接しドイツでもオペラに親しんでいた穂積が、「高く美しい聲といふ點に於てこれ程のを聴いたことはないやうに思ふ²⁴」と演奏会での三浦の歌唱を評しているのが興味深い。英国の音楽会で諸外国の音楽家と並ぶ、時にはそれ以上の演奏の技量と舞台上の華をもって立ち回り、聴衆を魅了したことを伺わせる証言である。

翌1915年1月9日には、三浦はマンチェスターのフリー・トレード・ホールで「ブランド・レーン・コンサート」に出演している。興行主のブランド・レーン Brand Lane はマンチェスターの実業家で、1897年頃から自らの指揮の下マンチェスター・フィルハーモニック合唱団の演奏会シリーズなどを手がけていたが、より大規模な管弦楽演奏会の興行で成功することを目

19 穂積重遠、『独英観劇日記』（東宝書店、1942年）、191-201頁。

20 「君が代」について、「初めは極めて低く、二回目はグッと大きく、それも真っ直ぐ歌つてしまはずに、数部合唱で豊みかけ段々と雄大莊重になつて堂々と歌ひ収める」編曲が、非常に面白かったと書いている。前掲書、194頁。

21 前掲書、198頁。

22 自伝によれば、下宿先の女主人でスコットランド出身のバートン夫人が発音を詳しく教えてくれたのだという。吉村編、『お蝶夫人』、39頁。

23 穂積、『独英観劇日記』、199-200頁。

24 前掲書、197頁。

論んで、1907年から「ブランド・レーン定期コンサート」を開催していた²⁵。この演奏会シリーズには1912年からヘンリー・ウッドが客演しており、三浦出演の演奏会でも彼がタクトを振った。ブランド・レーン・コンサートは、「セレブリティ・コンサート」とも呼ばれたように、有名演奏家をゲストに迎えた大衆向けクラシック演奏会であるが、レーンはこうした演奏会における広告の重要性を意識していたと言われ、演奏会のポスターにはごてごてした装飾が付き、大げさな宣伝文句が並ぶのが常であった²⁶。三浦出演の折も、日傘に文金高田姿の三浦と「マダム・タマキ・ミウラ、日本のプリマ・ドンナ」の文字が印刷された宣伝ビラや絵葉書が随所で配られたという²⁷。

演奏会のプログラムは、以下の曲目であった。ブランド・レーン・シンフォニー・オーケストラによるエルガー「威風堂々」第1番、ワーグナー「神々の入場」、パーシー・グレインジャー「オーケストラのためのコロニアル・ソング」及び「岸辺のモリー」、モーツァルトの「ミスエットニ長調」、チャイコフスキー「イタリア奇想曲」、ウッド編曲による「スコットランドの旋律にもとづくファンタジア」（ジョージ・バーンズによるスウォード・ダンス付き）、フレデリック・デイウォンのピアノ独奏でリストのピアノ協奏曲第1番、デイウォンのソロで3曲小品が続き、三浦による「さくらさくら」「螢」「慕わしき御名」と「エディンバラから1マイル」、バグパイプの演奏、ストラヴィンスキー「花火」²⁸。大衆向け演奏会でありながら、マンチェスターでは初演となるストラヴィンスキーの「花火」や英国生まれの作曲家グレインジャーの作品を取り上げるなど、充実した内容となっている。ロンドンと並び、第一次世界大戦下の1914～1915年でも高い水準の演奏会活動が保たれていたマンチェスターでの演奏会に登壇し、成功を収めたことで、三浦は歌手として改めて広く認知されることとなった。

この演奏会については出演料をめぐる興味深いエピソードがある。三浦が最初に出演依頼を受けた際、演奏料はいくら払えばよいかと聞かれたが、そもそも演奏で報酬を得たことが殆どないので相場の見当もつかない。懇意にしていた井上勝之助大使夫人に相談すると、「欲張ってみえると思うかもしれないが、後に続く日本の音楽家のためにも余り安くしてはいけない、アデリーナ・パッティやエンリコ・カルーソーは一度に1万ドルとるというから、その半分の5000ドルにしてはどうか」とアドバイスされたので、その言葉のまま5000ドルを要求したという²⁹。すぐに返信が返ってきて、戦時中はパッティもカルーソーも平常時の四分の一の2500ドルだ、だから貴方も300ドルで承知してもらいたい、とあった。三浦は「私にも四分の一で1250ドルくれればいいのに」と一瞬情けなく思ったと言うが、主催者側にすれば、ロンドンで一度演奏会に出演しただけの無名の日本人歌手が、自分を世界的大歌手と比較して出演料を要求し

25 Michael Kennedy, *The Halle Tradition: A Century of Music* (Manchester University Press, 1960), pp. 174-182を参照。

26 Ibid., p. 175

27 田辺、『考証三浦環』、158頁。

28 'Amusements - Concerts - Free Trade Hall,' *Manchester Evening News* (5 January, 1915), p. 8.

29 吉村編、『お蝶夫人』、36-37頁。

てくることに驚いたようで、後年まで人々の語り草となっていた。1939年2月2日付の *Rochdale Observer* に、「奇妙な出演料」の表題でこの時の経緯が語られている。「日本人歌手タマキ・ミウラの出演料は、どのアーティストにも増して奇妙なものであった。ウッド卿の推薦で、ブランド・レーン主催のマンチェスター・セレブリティ・コンサートに出演した折のことである。豪華な着物に身を包んだタマキ・ミウラは、出演料として400ギニーと『新しい傘』を要求してレーンを驚かせた。レーンから報告を受けたウッド卿は、400ギニーは高すぎると抗議したが、彼女は自分の着物には240ギニーかかっているのだからと言う。新しい傘については、マンチェスターはいつも雨が降っていると友人が言うので、と説明した。自分の出演料で傘を買えばいいじゃないか、と思う向きがあるかもしれないが、この日本のご婦人にとってはそんな単純な話ではないのである。後で聞いたところによると、出演料は100ギニーで受ける代わりに、プラットフォームに彼女のためのカーペットを敷くことという条件を付けたい。結局彼女は50ギニーで歌い、カーペットは敷かれなかったが、新しい傘が用意されたとか！³⁰」同じエピソードが前年に出版されたウッドの自叙伝に書かれているので、ここから転用したものであろう³¹。それにしても、出演料の相場が分からないという割に臆せず欲しいものを欲しいと言っている三浦も大した度胸である。

三浦はブランド・レーン・コンサートの前後にもいくつかの演奏会に出演しているが、多くの文献で言及がなかったり、日時、会場などの情報が不正確であったりする。アルバート・ホールでのデビュー以降に三浦が出演した演奏会について、今回の調査で確認できたものを以下に記す。

1. 1914年11月30日（月）「スコットランド大音楽祭」、アルバート・ホール³²
2. 1914年12月17日（木）「ベルギー難民救済慈善音楽会」、アルバート・ホール³³
3. 1915年1月9日（土）「ブランド・レーン・コンサート」、フリー・トレード・ホール（マンチェスター）³⁴
4. 1915年1月23日（土）「スコットランド大音楽祭」、アルバート・ホール³⁵
5. 1915年3月2日（火）「同盟国大演奏会」、キングスウェイ・ホール（ロンドン、ホルボーン）³⁶

これら公的な演奏会の他にも、いくつかのサロン・コンサートに呼ばれ、ロンドンの社交界

30 'A Strange Fee', *Rochdale Observer* (2 February, 1939), p. 8.

31 Henry J. Wood, *My Life of Music* (Purnell and Sons, 1938), pp. 265-266.

32 'Music and Musicians,' *The Sunday Times* (22 November, 1914), p. 2 ; 'Concerts, & c. - Royal Albert Hall,' *The Times* (27 November, 1914), p. 1.

33 'Concerts, & c. - Grand Patriotic Concert,' *ibid.* (5 December, 1914), p. 1.

34 'Free Trade Hall - Brand Lane Orchestral,' *Manchester Evening News* (5 January, 1915), p. 8. 'Caro nome,' 'Two Japanese Songs' が演奏曲目として記載されている。

35 'Music and Musicians,' *The Times* (17 January, 1915), p. 4 ; 'Special Announcements - Grand Scotch Festival and Patriotic Concert,' *ibid.* (15 January, 1915), p. 1. 「日本のプリマ・ドンナ三浦環が要望により 'Villanelle' 及び 'Within a Mile' を歌う」とある。

36 'Concerts. - Grand National Concert of the Allies,' *ibid.* (20 February, 1915), p. 1 ; 'Court Circular,' *ibid.* (24 February, 1915), p. 11 ; 'Grand National Concert,' *The Sunday Times* (28 February, 1915), p. 4.

で知られる存在となっていたようだ。例えば、三浦と親交のあった徳川頼貞は、ケンジントンにあったレディ・ウォーミングトン Lady Ann Warmington (Winch) (1852-?)³⁷の邸宅で、三浦の独唱会が開かれた折の思い出を随想録に書いている。レディ・ウォーミングトンから純日本式に日本の歌謡を歌ってほしいという希望を受けた三浦は、同時期ドイツからロンドンに逃れてきていた喜劇俳優の曾我廼家五郎夫人の三味線に合わせ、歌いながら日本舞踊を披露して喝采を浴びたという³⁸。こうして英国の様々な音楽シーンで歌い人々に印象を残していったことが、《蝶々夫人》への出演依頼につながっていく。

2-5 ロンドン・オペラ・ハウスでの《蝶々夫人》(1915年5月31日)

三浦の回想によれば、1915年3月末か4月初旬のある晩、テノール歌手ウラジミール・ロージン Vladimir Sergeyevich Rosing (1890-1963) が三浦の下宿先を訪れた。若干25歳のロージンであったが、自身のオペラ・カンパニーを持ちたいと考えて、自らマネージャーとなり同盟国によるオペラ・シリーズの開催を目指して働きかけていた。戦争のためフランスもののオペラができないので、ロシア、イタリア、日本のオペラの上演を考えているが、《蝶々夫人》のタイトル・ロールをやってもらえないか、という話であった。東京音楽学校在学中には日本初のオペラ上演と言われるグルック《オルフェオ》の公演でエウリディーチェを歌い、帝国劇場時代はハインリヒ・ヴェルクマイスターの《胡蝶の舞》やアウグスト・ユンケルの《熊野》などにも出演していた三浦であるが、本格的な欧州でのオペラの舞台、それも歌ったことのない《蝶々夫人》の主演とあってさすがに物怖じし、夫の政太郎や当時交流のあったアーノルド夫人こと黒川玉³⁹らに相談している。

「日本人であるタマキ・ミウラにしかできないオリジナルの蝶々さんを」という周りの後押しに出演を決めた三浦は、すぐさまリコルディ版のスコアを買い求め、この頃同宿であった京都帝国大学教授の心理学者、野上俊夫にイタリア語の発音教授をしてもらいながら譜読みを始める⁴⁰。本番まで一ヶ月ほどの猶予しかない中、300頁を超える総譜を毎日10頁ずつ暗記することに決めて、全曲を覚えきると、オペラ・ハウスへ出向いて伴奏を頼み練習したという。演技に関しては、幼い頃習っていた藤間流の踊りを取り入れ、不安に思った二幕最後の自害の場面の所作は曾我廼家五郎夫人に指導を仰ぎ、音楽と自然に合うように振り付けを完成させた。ま

37 弁護士、政治家として知られる初代ウォーミングトン男爵 Sir Cornelius Marshall Warmington (1842-1908) の妻。夫の死後音楽に傾倒し、自宅でしばしばサロン・コンサートを開催した。インド生活の経験があり、東洋に親しみを持っていたという。徳川、『蕃庭樂話』、『ウォーミングトン夫人』の項を参照。

38 前掲書、70頁。

39 Lady Arnold, Tama Kurokawa (1869-1962)、随筆家、東洋学者、詩人として著名なエドワード・アーノルド Edward Arnold (1832-1904) の未亡人。1897年の結婚後ロンドンで暮らし、当地の社交界に顔が広がったという。

40 1915年初め頃、三浦夫妻はバートン夫人の下宿からイタリア人のマドン夫人の下宿に移っている。三浦の自伝では転居先の所在地は「メーダーベル街」(田辺『考証三浦環』では「メーダーベル街」とされているが、1915年当時のロンドンの町名に当てはまるものは見当たらない。徳川『蕃庭樂話』には「マーブル・アーチの北のケンブリッジ・テレスに在る下宿」(69頁)とあるが、マドン夫人の下宿かどうかは未確認である。マドン夫人の下宿には、穂積重遠をはじめ、後に京都大学総長となった考古学者の濱田耕作、三菱自動車工業の会長を務めた田中利治、大日本航空総裁の児玉敏雄など、多数の邦人留学生が滞在していた。

た徳川頼貞は、ある時初舞台を控えて緊張していた三浦がやって来て、蝶々さんを演ずるのにどうしたら一番効果的か、と聞くので、西洋人の見た日本であるということを第一に心に留めておくのが大事でしょうと答えたと述べている⁴¹。そこで、背が丸く見えないよう帯を平たく結び西洋人の目から見て不自然でない演出を考える一方で、三三九度の場面に白い打ち掛けを着たり、日本女性の貞淑で愛情の細やかな部分を表現するように工夫したりと、「日本人の気持ちと姿を西洋のオペラに調和させる」という指針と共に「タマキ・ミウラの蝶々さん」が出来上がっていった。

1915年5月31日、ロンドン・オペラ・ハウスで《蝶々夫人》の幕が上がった。衣装と舞台美術は、画集 *The Colour of London* (Chatto & Windus, 1907) で名の知られた牧野義雄 (1883-1956) が担当した。キャストはレオン・ラフィット Leon Laffitte (1875-1938) のピンカートン、ジョルジェット・メイラルド Georgette Mevrard のスズキ、チャールズ・ヴァルモラル Charles Valmoral のシャープレス、オクターヴエ・デュナ M. Octave Dna のゴロー、レイモンド・エリス Ramond Ellis のヤマドリ、Powell Edwards ポウエル・エドワーズのボンゾ、エヴリー・アーデン Evely Arden のケイトという顔ぶれで、ヨーロッパ各地の歌劇場で活躍したラフィットを除いて、殆ど忘れ去られた歌手が大半であるが、公演の批評を見ると概ね好意的な評価を受けている。この舞台と同日の夜からドイツ軍の爆撃機ツェッペリンによる空襲が始まり、ロージンのオペラ・シーズンは途中で打ち切られてしまったが、三浦の「本物の蝶々さん」の舞台が英国はもとより日本でも広く報じられ、三浦が一躍時の人となったのは、多くの文献で知られる通りである。三浦の演奏の評価については、次項で詳しく取り上げる。

3. 電子新聞アーカイヴ収録記事にみる三浦の評価

3-1 資料とデータ

ここまで、三浦の伝記資料、三浦と関わりのあった邦人らの記録に基づき、英国での三浦の動向を振り返ってきた。本項では、BNA 及び GPS に収録された新聞記事における三浦の歌唱についての評価をみてみたい。この考察に用いた一次資料は、2018年5月～8月にかけて、BNA・GPS上で‘Tamaki Miura’のキーワード検索、‘Miura’ (フルネームでなく Mme. Miura とだけ書かれているものも多い) と年月日の組み合わせによる検索によって収集し、総数は56であった (告知、広告を含む)。これらの記事の収録誌タイトルと記事数は、表1に示す通りである。

41 徳川、前掲書、159頁。

表1. 該当記事収録誌タイトルと記事数

記事数	紙名
11	<i>The Times, The Sunday Times</i>
5	<i>Pall Mall Gazette</i>
4	<i>The Scotsman</i>
3	<i>Daily Mirror, Manchester Courier and Lancashire General Adviser, Manchester Evening News</i>
2	<i>Newcastle Journal, The Stage, The Tatler</i>
1	<i>Belfast News-Letter, Belper News, Grantham Journal, Hull Daily Mail, Leicester Daily Post, Rochdale Observer, Sheffield Daily Telegraph, The Graphic, The People, The Sphere</i>

表1に示されるように、最も多く三浦の活動を伝えたのはロンドンの日刊紙 *The Times* 及び *The Sunday Times* である。ここに掲載されたものが地方誌の批評欄に転載されることもあり、影響力があった。音楽関連の記事が充実する *Pall Mall Gazette* が続き、5回の言及があった。次に多いのは *The Scotsman* やマンチェスター近郊都市の新聞で、ブランド・レーン・コンサートやスコットランド音楽祭での演奏の様子がしばしば伝えられている。記事数は少ないものの、*The Stage* や *The Graphic* といった舞台に特化した全国紙でも取り上げられている他、イングランド中部から北部にかけての地域、北アイルランドのベルファストにも三浦のニュースが届けられていることが分かる。

以下に示す表2は言及された演奏会の記事数の内訳、図1の棒グラフは新聞媒体における月毎の三浦への言及数の推移を表している。

表2. 言及された演奏会の内訳

開催年月	演奏会名	記事数
1914年10月	愛国大演奏会 (アルバート・ホール)	4
1914年11月	スコットランド音楽祭 (アルバート・ホール)	2
1914年11~12月	スコットランド音楽祭・ベルギー難民救済慈善音楽会	1
1914年12月	ベルギー難民救済慈善音楽会 (アルバート・ホール)	2
1915年1月	ブランド・レーン・コンサート (フリー・トレード・ホール)	5
1915年3月	同盟国大演奏会 (アルバート・ホール)	5
1915年5~6月	《蝶々夫人》 (ロンドン・オペラ・ハウス)	36

図1. 言及数の推移（1914年11月～1939年2月）

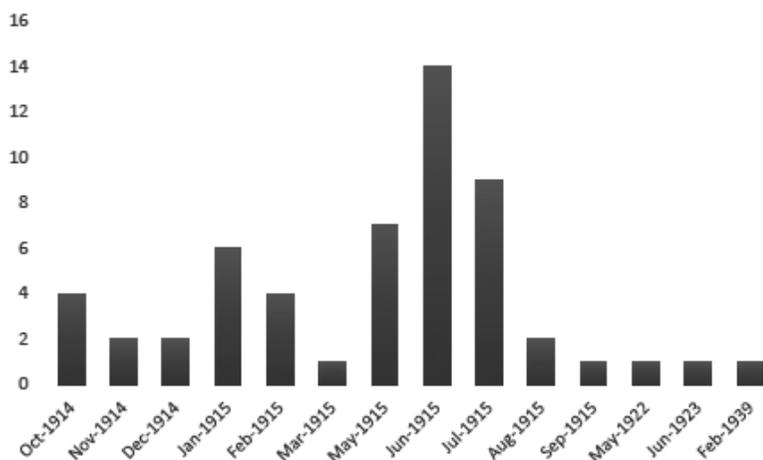


表2、図1に見るように、1915年5～7月にかけて《蝶々夫人》への言及が突出しており、関心の高さが窺える。その他に言及の多かった催しは、表2にある通り、デビューを飾ったアルバート・ホールの「愛国大演奏会」、ブランド・レーン・コンサート、アルバート・ホールの同盟国大演奏会であった。図1のグラフからは、1914年10月、1915年1月、1915年6月と三浦が演奏会を重ねる毎に言及数が増える傾向にあり、《蝶々夫人》が打ち切れ三浦が渡米する1915年9月を境に言及は途切れるが、その後も1922年、1923年、1939年と折に触れ言及され、英国の人々の記憶に残っていることが分かる。データの全体数が少ないので、詳細な分析は不可能であるが、BNA・GPSによって得られた情報の範囲では、以上のような傾向があると言える。

以下の項では、特に具体的に三浦の歌唱に対して向けられた批評に着目して検討する。

3-2 「愛国大演奏会」の評価

三浦の自伝には、アルバート・ホールでのデビューについて、ロンドンの新聞が筆を揃えて「メルバやカルヴェにひけをとらぬ美しい声と素晴らしい芸術の持ち主である。今シーズンはマダム三浦が最大のホープとして楽壇を風靡するであろう」という批評をかき、その記事が英国中の新聞に掲げられたとあるが⁴²、今回の調査ではこの根拠となるような記事は見いだせなかった。世界的大歌手との比較は、ウッドか他の誰かの講評が強く記憶に焼き付いて出てきたものか。記事が見つからないだけという可能性ももちろんある。

三浦のデビュー翌日の *The Scotsman* に掲載された「愛国大演奏会」についてのレビューに、三浦について言及がある。セント・ジョン教会関係者、インド人、植民地出身の人々、ベルギー人らに混じって大勢の日本人の応援団が「有名な日本のプリマ・ドンナ」のために集まったとあり、「日本人歌手の評判上々」の小見出しと共に、三浦の演奏は素晴らしい評価を受けてい

42 吉村編、『お蝶夫人』、36頁。

たと伝えている⁴³。同日の *Leicester Daily Post* にも、「日本のプリマ・ドンナ、マダム・ミウラが、3曲を自国の言葉で歌い、(聴衆席にいる)極東の同志から熱烈な歓迎を受けた」とある⁴⁴。その他には、*Grantham Journal* が「ロンドンデビューを飾るマダム・ミウラが自国の着物で登場した」とだけ書いている⁴⁵。これらの記事では、演奏会の規模と会場の活気、マダム・パッティが聴衆の喝采をあげたことと三浦のデビューには触れているが、三浦の演奏に関する具体的な批評はない。

3-3 その他の演奏会の評価

ブランド・レーン・コンサートのレビューには、三浦の歌唱について比較的具体的な記述が見られる。*Manchester Courier and Lancashire General Advertiser* のある記事は、次のように書いている。「彼女の声は非常に際だってよく通り、それでいて耳に心地よい音色を持っている。軽々と発声し、イタリアのスタイルにはないある種の歌い方をするものの、ヴェルディの aria など歌うとそれはそれで魅力がある。⁴⁶」三浦の声の特徴について、かなり踏み込んで述べられているものの、「イタリアのスタイルにはない」歌い方について、他の多くの批評と同じく、どのような特徴を指しているのかは具体的に書かれていない。レビューは「最も素晴らしかったのは日本の歌であるが、『エディンバラから1マイル』もなかなか小気味よかった。勇敢にもスコットランド訛りに挑戦したから、という理由だけではなくて。⁴⁷」と続く。アルバー・ホールでのスコットランド音楽祭でも「エディンバラから1マイル」が好評だったとあり⁴⁸、スコットランド訛りで歌うこの曲がすっかり三浦の十八番となっていたようだ。

3-4 《蝶々夫人》の評価

三浦への関心が高まるにつれて、三浦の演奏や出演した舞台に関する批評はもちろん、関係する人々の話、舞台以外での三浦の様子など、様々な内容が散見されて興味深いのだが、ここでは特に歌唱と演技に着目して、いくつかの批評を取り上げたい。

三浦の《蝶々夫人》出演は、1915年5月7日には既に *Newcastle Journal* に報じられている⁴⁹。5月13日には、大衆誌 *Daily Mirror* が和装姿の上半身写真入りで三浦へのインタビュー内容を伝えた。「彼女が昨日語ったところによると、彼女は《蝶々夫人》の特別公演に主演する最初の歌手で、この公演のために特別な日本の舞台背景が描かれているとのこと。彼女は上品で、きびきびとして、チャーミングで明るい、かわいらしい声をしている。⁵⁰」類似の記述は *The*

43 'King and Queen Attend a Patriotic Concert,' *The Scotsman* (26 October, 1914), p. 7.

44 'King and Queen at Patriotic Concert,' *Leicester Daily Post* (26 October, 1914), p. 2. 読売新聞の記事には、日本歌曲を英語で歌ったとの記述がある。読売新聞 [夫人付録]、「英國兩陛下の御前にて環女史獨唱の光聲に浴す」(大正3年、12月5日)、5頁。

45 'Metropolitan Gossip - The King and Queen at a Patriotic Concert,' *Grantham Journal* (31 October, 1914), p. 6.

46 *Manchester Courier and Lancashire General Advertiser* (11 January, 1915), p. 4

47 Ibid.

48 'Scottish Concert at the Albert Hall,' *The Scotsman* (25 January, 1915), p. 10.

49 'Music and Musicians,' *Newcastle Journal* (7 May, 1915), p. 5.

50 'A Brilliant Russian Season,' *Daily Mirror* (13 May, 1915), p. 10.

People の「蝶々夫人」公演告知記事にも見られ、こちらには「日本のグランド・オペラに出演した最初の歌手」という紹介文がつく⁵¹。公演の前から、写真やインタビューで日本の歌手の人となりや宣伝されていることが分かる。

5月31日の初演が開けた後には、すぐに詳細な批評が出ている。*Pall Mall Gazette* の記事は以下のような内容だ。「ロージン氏は、彼の二度目のシーズンに「蝶々夫人」を選んだ。しかも日本人の歌手、マダム・タマキ・ミウラがタイトル・ロールを演じるという趣向だ。彼女がオペラに吹き込んだのは、単に出身地の雰囲気という以上のものであった。特に蝶々さんの幸せが表れる場面では、そのチャーミングな所作で舞台全体を明るくさせた。独特な音色のある彼女の声は、完全に西洋的になることはなく多少の東洋的な性質を残している。高いレジスターの声は極めて澄み最も音楽的に響き、中声部にもいくらか驚くほど豊かに響くところがある。緊張からリズムの不確かな部分があったが、(…)概して素晴らしいデビュー公演だったと言えよう。聴衆からマダム・ミウラに祝福の賞賛が送られた。⁵²」三浦の舞台上での演技、美しいと定評の高音を評価する一方で、やはり「東洋的」な発声に触れている。

6月2日、ロンドンの週刊紙 *The Tatler* は、「東京、帝国劇場から来た『新しい蝶々さん』」という見出しで、蝶々さんに扮し和傘と扇を持って微笑む三浦の写真を掲載した(図2参照)。

図2. “A New Butterfly” from the Imperial Theatre, Tokio,’ *The Tatler*, (2 June, 1915), p. 5⁵³



51 ‘Music,’ *The People* (16 May, 1915), p. 4.

52 ‘London Opera House – Madama Butterfly,’ *Pall Mall Gazette* (1 June, 1915), p. 6.

53 ©Illustrated London News Ltd/Mary Evans. Image created courtesy of The British Library Board.

6月16日、*The Tatler* は再び三浦の写真を掲載しているが、今度は見開き2頁に渡る舞台写真で、蝶々さん、蝶々さんと子供、蝶々さんとピンカートンの3枚組みになっている(図3)。筆者の知るところこれまで文献では紹介されていない写真で、ロンドン・オペラ・ハウス公演の様子が窺える貴重な資料である。「素晴らしい『蝶々夫人』、偉大でも小さな日本のプリマ・ドンナ、タマキ・ミウラがロンドン・オペラ・ハウスで演じる」というタイトルに、「三浦はこれまでの演奏家とは全く異なる蝶々さんの解釈を披露した。常に男性を立てるといふ謙虚な東洋女性の心は、西洋人には恐らく表現できないだろう。この小柄な婦人の声は美しいことに加え、会場内を簡単に満たすだけの声量を持っている。」と説明書きがついている。

図3. 'A Wonderful Performance of "Madama Butterfly",' *The Tatler* (16 June, 1915), pp. 20-21⁵⁴



6月2日の *Daily Mirror* は、「素晴らしい蝶々さん」「日本のプリマ・ドンナ」「彼女は高みを目指す」の小見出しの下に、今まで何度も『蝶々夫人』を観ているが一番と思える演技である、本物の日本人の蝶々さんを得たのは劇場史に残る出来事となるだろう、ペースに満ちたリアルな蝶々さんの演技、甘く力強い歌声が印象に残ったと書いている⁵⁵。同日の *Manchester Courier and Lancashire General Advertiser* もまた、肯定的な意見を寄せている。「ブッチーニ

54 ©Illustrated London News Ltd/Mary Evans. Image created courtesy of The British Library Board.

55 *Daily Mirror* (2 June, 1915), p. 10.

による不朽の名作のタイトル・ロールを演じたマダム・タマキ・ミウラは、本物の日本人であるというばかりでなく、真の芸術家であり、生まれながらの女優、人々を引きつける本物の歌手であるということ、今まさに証明しようとしている。男をひたむきに信じるゆえにたやすく裏切られてしまう蝶々さんを、透き通った、鳥のような歌声と、微妙な表現の変化で見事に演じた。甘く可憐に響く声域はやや狭いが、所作の優美さは何と言っても素晴らしいし、醸し出されるペーソスと、きびきびとした動きがよい効果を生んでいる。もちろん、彼女の演技方は従来のイタリア・オペラとはかなり異なるものだが、型にはまらない新鮮さが、かえってここでは魅力的にうつる。⁵⁶⁾

6月3日 *The Stage* の批評も興味深い。この記事を書いた記者は、三浦の演技が放つコミカルさとシリアスさの対比が、当時欧州で女優・ダンサーとして活躍していた花子（太田ひさ、1868-1945）に通ずるところがあると述べている。声の質については、「彼女の人種特有のちょっと鼻にかかるような音質があり、変にいななくようなところがあるが、疑いなく優れた能力を持つ歌手である」（p. 21）と書いている。

この他にも、声や演技に関して触れているものを挙げておく。7月19日付の *The Scotsman* は、全体としては三浦に好意的な見方を示している。「まるで日本の扇から抜け出てきたかのように、小柄で、魅惑的。その芸術性豊かな歌声は、音量はさほどないが、真実味があり、プッチーニの悲劇のヒロインの理想的模範と誰もが認めるだろう。⁵⁷⁾」このように三浦に対してポジティブな見方をする批評が多い一方、以下の *The Sunday Times* の記事のように、やや手厳しいものもある。「昨晚のロンドン・オペラ・ハウスには《蝶々夫人》の公演に超満員の観客が詰めかけた。マダム・タマキ・ミウラが再び主演し、彼女のリアルな解釈は西洋人がこうであってほしいと想像するような日本の雰囲気へ見る者を誘う。しかし、またしても、日本の声で表される蝶々さんの喜び、希望、悲しみというのが、豊かに流れるようなイタリアの旋律とどうしても合致しないのだ⁵⁸⁾」西洋の声と音楽で日本の心を歌うという三浦の挑戦であったが、そこにかえって差異を感じる者もあったということだろうか。

4-4 評価のまとめ

以上、具体的に三浦の歌唱と演技について評価しているものを中心に、いくつか記事を取り上げて内容を見てきた。ここで項目別にまとめてみよう。三浦の印象については、「かわいらしい」「明るい」と評するものが圧倒的で、舞台上では少女のように見えたという声もあった。声質は「よく通る透き通った声」という表現が最も多く、次いで「甘い」「力強い」といった形容が見られる。特に高音域が極めて美しく響くというのは複数が指摘しており、中音域も比較的よく響くという評価がある一方、甘く可憐に響く声域はやや狭いとする声も聞かれた。リズムの甘さが一記事で指摘されているが、音程や声の割れ、発音、他の歌手とのアンサンブル

56 *Manchester Courier and Lancashire General Advertiser* (2 June, 1915), p. 2.

57 'London News,' *The Scotsman* (19 July, 1915), p. 7.

58 'London Opera House,' *The Sunday Times* (18 Jun, 1915), p. 11.

などについて問題視しているものではなく、発声については評価が割れているものの、全体としては比較的安定した演奏をしていたものと思われる。演技の巧みさは多くが指摘しており、「チャーミング」で「コミカル」、かと思えば「シリアス」かつ「真実味のある」演技で観客を魅了したと評価されている。所作が優美である、上品であるという評もいくつかみられた。こうした動きの細やかさ、見た目のかわいらしさ、しとやかで品の良い雰囲気に触れて、日本人による「本物の蝶々さん」であると賞賛する声が多い。

意見が割れたものは、まず声量である。「たやすく会場を満たす声量がある」という評がある一方で、「声量はさほどない」という声もあった。劇場の隅々まで響くことが理想と考えると、声量がないという指摘はオペラ歌手としては厳しい批判である。実際に三浦の蝶々さんを聞いた穂積重遠も、どうしても音量不足で天井にまで音が響き渡らないと書いており⁵⁹、一定数の聴衆が感じた課題であったようだ。

更に興味を引くのは、「イタリアのスタイルではない」「独特」「東洋」「鼻にかかった声」と評価されていることであろう。70年以上前の録音をもとに実際の舞台上の演奏がどうであったかを論じることには無理があるが、それでもあえてこうした指摘の根拠を求めて三浦の残した録音を聞くと、確かに邦楽的な要素が感じられるような箇所もあるような気がする。例えば「ある晴れた日に」‘Un bel di, vedremo’の中でも低声域で同音を続けて歌うような部分（‘E come sarà giunto’など⁶⁰）はやや音が平たく歌の発声というより殆ど語っているように聞こえ（もちろん録音性能の低さから音質が変わって聞こえるということもあるだろうが）、同音をたたみかける中に何か節回しのような微細な音の揺れも感じる。この辺りが「独特」「東洋」「鼻にかかった」などと言われたものの正体であるかもしれない。

4. 英国時代の三浦の評価—「ジャパニーズ・プリマ」の幻想か、実力か

これまでの考察をふまえた上で、改めて英国時代の三浦の音楽活動をどう評価することが出来るか。まずは、三浦の英国生活は、国際的キャリアを歩む音楽家としての基礎訓練の場となったと言えるだろう。戦争難民として英国に渡り、余裕のない生活の中で、臆することなく交友関係を広げ、著名な指揮者を前にオーディションをものにし、方々の演奏会に出演、出演料の交渉もできるしたたかさを覚え、初主演のオペラの公演で成功を収めた。《蝶々夫人》の契約は一回800ドルと言われるが⁶¹、1900年代の米国に暮らすオペラ歌手の所得は、一月に250～400ドルあればまずまずだったというデータがあることを考えると⁶²、演奏家初期のキャリアとし

59 穂積、『独英観劇日記』、268頁。

60 「三浦環全集」（日本コロムビア、1995年）、disc-1 track 5、02：21-02：24あたり。

61 田辺、『考証三浦環』、313頁。

62 Jane Cooper, *The Canadian Nightingale: Bertha Crawford and the Dream of Prima Donna* (Friesen Press, 2017), p. 13.

などについて問題視しているものではなく、発声については評価が割れているものの、全体としては比較的安定した演奏をしていたものと思われる。演技の巧みさは多くが指摘しており、「チャーミング」で「コミカル」、かと思えば「シリアス」かつ「真実味のある」演技で観客を魅了したと評価されている。所作が優美である、上品であるという評もいくつかみられた。こうした動きの細やかさ、見た目のかわいらしさ、しとやかで品の良い雰囲気に触れて、日本人による「本物の蝶々さん」であると賞賛する声が多い。

意見が割れたものは、まず声量である。「たやすく会場を満たす声量がある」という評がある一方で、「声量はさほどない」という声もあった。劇場の隅々まで響くことが理想と考えると、声量がないという指摘はオペラ歌手としては厳しい批判である。実際に三浦の蝶々さんを聞いた穂積重遠も、どうしても音量不足で天井にまで音が響き渡らないと書いており⁵⁹、一定数の聴衆が感じた課題であったようだ。

更に興味を引くのは、「イタリアのスタイルではない」「独特」「東洋」「鼻にかかった声」と評価されていることであろう。70年以上前の録音をもとに実際の舞台上の演奏がどうであったかを論じることには無理があるが、それでもあえてこうした指摘の根拠を求めて三浦の残した録音を聞くと、確かに邦楽的な要素が感じられるような箇所もあるような気がする。例えば「ある晴れた日に」‘Un bel di, vedremo’の中でも低声域で同音を続けて歌うような部分（‘E come sarà giunto’など⁶⁰）はやや音が平たく歌の発声というより殆ど語っているように聞こえ（もちろん録音性能の低さから音質が変わって聞こえるということもあるだろうが）、同音をたたみかける中に何か節回しのような微細な音の揺れも感じる。この辺りが「独特」「東洋」「鼻にかかった」などと言われたものの正体であるかもしれない。

4. 英国時代の三浦の評価—「ジャパニーズ・プリマ」の幻想か、実力か

これまでの考察をふまえた上で、改めて英国時代の三浦の音楽活動をどう評価することが出来るか。まずは、三浦の英国生活は、国際的キャリアを歩む音楽家としての基礎訓練の場となったと言えるだろう。戦争難民として英国に渡り、余裕のない生活の中で、臆することなく交友関係を広げ、著名な指揮者を前にオーディションをものにし、方々の演奏会に出演、出演料の交渉もできるしたたかさを覚え、初主演のオペラの公演で成功を収めた。《蝶々夫人》の契約は一回800ドルと言われるが⁶¹、1900年代の米国に暮らすオペラ歌手の所得は、一月に250～400ドルあればまずまずだったというデータがあることを考えると⁶²、演奏家初期のキャリアとし

59 穂積、『独英観劇日記』、268頁。

60 「三浦環全集」（日本コロムビア、1995年）、disc-1 track 5、02：21-02：24あたり。

61 田辺、『考証三浦環』、313頁。

62 Jane Cooper, *The Canadian Nightingale: Bertha Crawford and the Dream of Prima Donna* (Friesen Press, 2017), p. 13.

ては大成功であったと言っているだろう。

三浦の実際の歌唱については、前項で検討した通り、音楽的に評価の分かれる要素がありながらも、澄んだ美しい声、確かな演技は多くの批評で評価されていた。ここで注意したいのは、海外における演奏活動を評価する際についてまわる、「ジャパニーズ・プリマ」という一種のオリエンタリズム幻想が演奏家としての評価につながっているかどうか、つまり日本人であるがゆえにもてはやされているのかという問題だ。オリエンタリズムが更に日米の権力関係に基いたジェンダーの力学に結びつきやすい米国は特に、この問題のために音楽家としての三浦の評価を検討しにくい感すらある。米国で書かれた三浦に関するレビューの中には、吉原真里が紹介しているように、「本物の蝶々さん」と「可憐でかわいい日本歌手」のイメージが重ね合わされ、殆ど見下すかのように三浦を評するものも見受けられる。例えば1920年2月12日の *Musical Courier* に掲載された批評はこのような調子だ：「三浦環はまさに『本物』である。彼女は実に可憐で、実に日本的で、(…) ネジを回すと数時間役を演じたり歌を歌ったりして、その後では埃をはらって再びそっと棚に戻されるような、かわいらしい小さな古人形のような。彼女はあのおかしな小さい足でちょこちょこ走り回って、西洋のプリマドンナを可愛らしく真似てみせた。しかし彼女はまごうことなくニッポンジンであった。⁶³」

英国の批評においても、「日本人の本物の蝶々さん」が強調され、「かわいい」「きゃしゃな」といった言葉で三浦の印象が語られているのは先に見た通りであるが、*Music Courier* の批評にあるような冷やかな態度は感じられない。むしろ、声の特徴や舞台での三浦の表現をとらえて、誠実に評価しようとするものが殆どであったことは、本稿で紹介したレビューからも明らかであろう。この点において、英国で三浦がデビューを飾ったことは幸運であった。

もちろん、英国の三浦が「ジャパニーズ・プリマ」の幻想、あるいは「物珍しさ」から解放されていたわけではないだろう。例えば、ウッドのオーディションで即座にロンドンデビューが決まったのは、三浦の歌が素晴らしかったという以上に、多くの聴衆を呼び寄せ金の収益をできる限り上げたい慈善演奏会の企画にあって、ロンドンの人々が未だ接したことのない日本のプリマ・ドンナの出演が、大きな呼び物になると見なされたためとも考えられる。それでも、英国楽壇の重鎮であり、コンサート文化の中核にあったウッドに出演を認められたのであるから、三浦がコンサート歌手として一定の評価を得ていたことは疑いない。ウッドは自叙伝に、「彼女をコヴェント・ガーデンに留め置いておけばよかった。きっと大成功したことだろう。⁶⁴」と書いている。そこに「ジャパニーズ・プリマ」の新奇性を感じていたとしても、透き通る声で軽やかに歌い演じる三浦の音楽に多くの人が心を動かされたこともまた、真実であろう。

63 吉原真里、『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか?』、48頁。

64 Wood, *My Life of Music*, p. 266.

5. 今後の調査の展望と課題

本稿では、考察の蓄積の少ない英国時代の三浦の音楽活動について、二つの電子新聞アーカイブを用い、現時点で入手できる一次資料を用いながら、三浦の活動状況を把握すると共に、その歌唱がどのように受容されたか、その一端を明らかにした。これがごく限定的な資料に基づいた調査であることは言うまでもなく、今回は対象としなかった音楽雑誌における批評も含めて、より多角的に三浦の活動と受容を考察していくことが今後の課題である。

三浦環に関する研究は、彼女の歌唱それ自体がどのようなもので、どう評価されたかということが詳細な考察の対象となることは極めて少ない。大正時代に女性職業家、それも国際的キャリアを歩む音楽家としての人生を選んだことで、何かと世間との軋轢を経験することになった三浦の生涯は、ジェンダー研究のトピックとして魅力的だし、三浦を通じて具現化された蝶々さんのイメージの伝播と影響は、先に述べたような20世紀のオリエンタリズムとそれを取り巻く性差や人種といった問題を考える上で興味深い研究対象である。このように三浦を文化的な文脈に位置づける様々な考察が増えていく一方で、三浦自身が作り出した音楽についての評価は後手に回っている感が否めないのも事実である。近年は録音を用いたパフォーマンス・スタディーズによって、19世紀末から活躍したオペラ歌手たちの演奏への評価が進んでいる。こうした先行研究を拠り所に三浦の残した録音を考察し、新たな角度から演奏家としての評価を試みるような研究も、今後期待されるだろう。

(本学講師 = 英語担当)